8 届けられた手帳

「え、お父さんの手帳が？」

四月の暖かい穏やかな日のこと。福島で農業を営む高野和江さんの所に、一冊の古びた手帳が届けられました。

和江さんの父・忠吾さんは今から六十年以上も前に第二次世界大戦に従軍し亡くなりました。和江さんがまだ六歳の時です。しかし、父の死を伝えたのは「戦死報告」という一枚の紙切れだけで、和江さんのもとには遺骨も遺品も何も届きませんでした。

そんな父の手帳が、六十年以上もの時を越え、七十一歳となった和江さんの元に届いたのです。父のたった一つの遺品と対面した和江さんは、驚きを隠せませんでした。そして、

（なぜ今になって父の手帳が……。）

という気持ちが、和江さんの中に驚きや感動の気持ちとともにわき起こってきました。

この手帳を届けてくれた福島県庁に問い合わせたところ、埼玉県春日部市に住む村田修さんという方が厚生労働省に届けてくれた、ということでした。和江さんははやる気持ちを抑えながら、村田さんに電話をしました。

「わたしは千葉忠吾の娘の高野和江と申します。父の手帳が先日わたしの元に届きました。福島県庁に伺ったところ、村田さんが厚生労働省にお届けになったとわかりました。本当に言葉では言い尽くせないくらいです。」

電話口に出た村田さんに和江さんはまずお礼を言いました。和江さんの話を聞いて、電話の向こうの村田さんの声にも驚きとうれしさが表れました。

「あの、村田さんはどうして私の父の手帳をお持ちだったのでしょうか。県庁の方からは詳しくは知らされなかったのですが。」

「高野さんはどうしてその手帳が届けられたのか、ご存じないんですね。実は、これはオーストラリアから届けられた手帳なんですよ。」

村田さんの意外な答えに、その理由が知りたくて和江さんの胸はますます高鳴りました。

村田さんは春日部市の中学校でＰＴＡ会長を務められたかたわら、この中学校とオーストラリアの学校との姉妹校交流のお手伝いをしています。

昨年の姉妹校交流では、オーストラリアからの訪問団が日本を訪れました。その引率の先生が持ってきたのが、この手帳です。

「この手帳はね、戦地であったニューギニアで拾われたものなんですよ。拾ってくれたのは、当時日本の敵国であったオーストラリア軍の兵士の方なんです。」

（敵国のオーストラリアの方が？）

「引率の先生はこの手帳を友人から託されました。友人の父がこれを拾ったオーストラリア軍兵士だったのです。彼らの願いは、『この手帳を家族のもとに届けること』でした。向こうの方からこんな相談があるとはね。私も最初はびっくりしました。」

「そうだったんですか……。」

戦地では戦車や迫撃砲、機関銃の昼も夜もない攻撃がくり返され、次々とたくさんの命が失われたと聞きます。そんな戦地で、敵軍であった日本軍兵士の小さな手帳を拾ってくれたこと、そして、その後も長い時間をこえて手帳を届けようとしてくれた方々がいたことも和江さんにはとても意外なことでした。

「私も彼らの思いに応えなくてはいけないと思いました。そこで、手帳を預かった翌日、さっそく国の関係する機関を訪れました。オーストラリアの訪問団に残されていたのはわずか一日でしたからね。」

電話越しの村田さんの声にも力が入っているのが伝わってきました。

「古いたったひとつの手帳ですから、窓口でもなかなか取り合ってもらえなかったけど、私も必死でお願いをしましたよ。いくつも省庁を回って、ようやく厚生労働省の方に話を聞いてもらったときにはどれだけうれしかったか……。いやあ、でもこうやってあなたに手帳が届いて、本当によかった。」

戦争中に拾った誰のものかも分からない、たった一冊の古びた手帳。でも、和江さんにとっては、小さいときに別れた父のかけがえのない大切な手帳です。この手帳が和江さんの手元に届くまでに、国境を越えてこんなにも多くの人が関わってくれたのです。

「何と言っていいか……。村田さん、本当に、本当に……。」

和江さんのお礼の言葉は、あふれる涙で声になりませんでした。

手帳が届いてから、和江さんは毎日のように、何度となく手帳を読み返しました。戦地で日々命に向き合っていた父のことを思うと、自然と涙がこぼれてきます。また、それと同時に、和江さんの胸には父への思いとは別の熱い気持ちもこみ上げてくるのでした。

（こうして私の手元に手帳が届いたのも、国境を越えて大勢の方々が善意をつないでくれたから。何とかしてその思いに応えたい……。）

和江さんは英語も話せないし書くこともできません。オーストラリアに行って手帳を届けてくれた方へ直接気持ちを伝えることはできません。そこで、和江さんはこれまでのことを娘さんに話し、娘さんに掛け軸に書いてもらってその思いを届けることにしました。

「お母さん、掛け軸に書く字は何にするの？」

「それはね、もう決めてあるのよ。」

和江さんが娘さんにお願いしたのは、「和」の一文字でした。

（国を越えて、互いに手を取り合う平和な世の中になることを願って……。）

春日部からオーストラリアへ姉妹校訪問団が向かう時が来ました。和江さん母子の心がこめられた掛け軸は、村田さんを団長とする訪問団に託されました。村田さんはその思いをしっかりと受け止め、オーストラリアに向かいました。

はるか遠くオーストラリアに思いをはせながら、和江さんは青く澄みわたった初夏の空を、いつまでもいつまでもを見上げていました。